

6:では、日本で親しまれてきた「アート」と、世界で語られる「ART」は、何が違うのでしょうか？

私は、日本では長い間、「作品そのもの」よりも、“売れやすさ”や“親しみやすさ”を中心に市場が形成されてきたことが、大きな違いだと思っています。もちろん、それによって日本独自の豊かな視覚文化が育まれてきました。イラスト、デザイン、キャラクター文化など、日本の表現力は世界的に見ても非常に強いものがあります。

しかし一方で、世界の ART マーケットでは、「その作品が社会にどんな問いを投げかけるのか」「作家がどんな思想や哲学を持っているのか」が強く求められます。つまり、“美しい”“人気がある”だけではなく、その作品が時代や社会とどう接続しているのかまで含めて評価されているのです。

そのため、日本では高く評価される作品が、海外ではほとんど評価されないことがあります。逆に、日本では難解だと思われる作品が、世界では極めて高く評価されることもある。このギャップは、単なる好みの違いではありません。私は、「アートをどう社会の中に位置づけてきたか」という、市場そのものの構造の違いだと思っています。

また、これまでギャラリーや百貨店も、「売れるもの」を中心に市場を成立させてきた以上、既存の価値観や成功体験を更新することは、決して簡単なことではありません。しかし私は、近い将来、こうした「ART」を真正面から問いかける展覧会が、日本でも当たり前のように広がっていくと確信しています。

なぜなら、世界ではすでに、ART が単なる装飾ではなく、人間の価値観や社会そのものを動かす存在として共有されているからです。

日本もこれから、単に“売れる作品”を並べる時代から、「なぜこの作品が存在するのか」「なぜこの価値が共有されるのか」を考える時代へと入っていくと思っています。

私は、今回の展覧会は、その転換の入口になると信じています。